

豊能町埋蔵文化財調査報告書第2集

吉川井戸城発掘調査概要報告書



2003・3

豊能町教育委員会

はじめに

本町には、古より祖先が築き上げた貴重な文化遺産が多く残されています。

大阪府文化財地図には、豊能町内に四十六ヶ所の文化財が示されており、当教育委員会では、これらの歴史的文化遺産が生涯学習の一環として活用できるよう、その保護・研究に努力してまいりました。文化財は国民共有の財産であるとともに、地域住民にとっては心のよりどころとなるものです。そのため、その保護はもちろん積極的な活用が求められているところです。

発掘調査は、主に開発等で失われていく埋蔵文化財の記録保存のために行われますが、これまでに、地域の歴史を理解するために役立つ数多くの貴重な資料を累積してきました。

本書には、平成13年度に実施した吉川地区の急傾斜地崩壊防止工事に伴う発掘調査の概要報告を収録しております。

本書が、町民の皆様の歴史解明の一助となることを願うとともに、学術の分野でもご活用いただき、ご批判、ご指導賜りましたら幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査に際しまして多大のご協力をいただきました関係者の皆様に厚くお礼申し上げまして、刊行のご挨拶といたします。

平成15年3月

農能町教育委員会
教育長 矢加部 英敏

例　　言

1. 本書は、大阪府池田土木事務所による吉川地区急傾斜地崩壊防止工事に伴い、平成13年度に豊能町教育委員会生涯学習推進課文化財保護担当が実施した吉川井戸城跡遺跡発掘調査における概要報告書である。
2. 調査は、豊能町教育委員会生涯学習推進課文化財担当小嶋均を担当者として、平成13年11月12日に着手し、平成13年11月30日に終了した。
3. 内業及び整理は、野村大作、辻武司、辻美穂、小嶋均が行った。
4. 本書の執筆・作成については、小嶋均が行った。ただし、第3章については、野村大作、辻武司、辻美穂が執筆した原稿に小嶋が加筆したものである。
5. 本書における図面の標高は、TP（東京湾平均潮位）を用いた。また、方位は地図以外について磁北である。
6. 本書における図面の十色は、『新版標準十色帖』第10版（小山正忠・竹原秀雄編、農林水産省農林水産技術事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修1990年度版）を用いて目視により比定した。
7. 調査に要した費用は、大阪府池田土木事務所が負担した。
8. 発掘調査から本書作成に至る間、以下の諸氏より貴重なご教示を得た。特に、野村大作、辻武司、辻美穂の三氏については、本書作成全般にわたって多大のご協力をいただいた。記して感謝の意を表する。（順不同・敬称略）
西川隆夫、中島康隆、高橋成計、福田薰、森田克行、辻本武、乾岩男、森孝純、田和好、籠谷次郎、前田豊邦

本文目次

例 言

第1章 位置と環境

 第1節 地理的環境 1

 第2節 歴史的環境 2

第2章 調査にいたる経緯 5

第3章 調査の成果

 1. 測量調査 6

 2. 発掘調査 8

 3. 出土遺物 10

第4章まとめと考察 12

図版目次

写真図版 1	上段一調査地遠景（南より）	下段一調査地遠景（西より）
写真図版 2	上段一調査地遠景（西より）	下段一堀切1（西より）
写真図版 3	上段一A区調査前状況	下段一A区西側法面
写真図版 4	上段一A区切岸とC区	下段一B区調査前の状況
写真図版 5	上段一A区よりC区・B区を望む	下段一B区・礫の高まり
写真図版 6	上段一B区遺構（南より）	下段一B区遺構（東南より）
写真図版 7	上段一B区炭層	下段一C区第2トレンチ
写真図版 8	出土遺物	

挿図目次

第1図	豊能町位置図.....	1	第7図	第2トレンチ位置図.....	10
第2図	豊能町地勢図.....	1	第8図	出土遺物.....	10
第3図	周辺遺跡分布図.....	2	第9図	福岡県鷹取城出土鬼瓦.....	11
第4図	現況合成図.....	3	第10図	井戸城縄張り推定図.....	13
第5図	井戸城平面図.....	7	第11図	井戸城縄張り図.....	14
第6図	第1トレンチ平面図.....	9	写真1	出土鬼瓦破片.....	11

第1章 位置と環境

第1節 地理的環境（第1図・第2図）

大阪府豊能郡豊能町は大阪府の北端部に位置する。北は府県境をなし京都府亀岡市に、南は茨木市及び箕面市に、西は能勢町及び兵庫県川西市に接している。

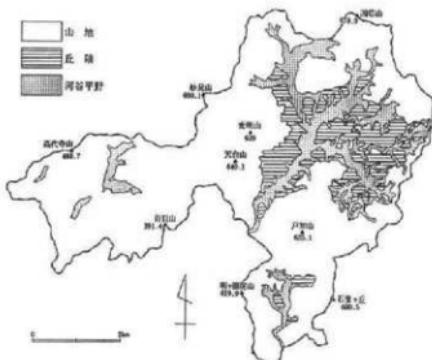
北摂山地の東部域に位置する本町の地形は、まとまった平地は極めて少なく、わずかに山地の中を縫うように走る小河川によって開析された小規模の河谷平野が展開するに過ぎない。町域の約70%は山地で構成され、耕地面積は極めて乏しい。さらに、町域中央部には妙見山を主峰とする標高600～700mの急峻な山脈が存在し、町域が東西に分断されている。

今回の調査地である吉川地区は、北摂山地内に位置し、標高250～500mの老年期に近い高原性の山地が北東から北西に高く、南から南西へ低く連なっている。北東の山脈の盟主・妙見山及び北西の独立峰高代寺山から発する初谷川とその支流が吉川盆地を形成し、猪名川に合流し大阪湾に注いでいる。吉川盆地は、吉川地区の中央部に位置し、初谷川・平井川の浸食・堆積による極めて狭小な平地で、標高200～250mを測る「谷間」ともいうべき小盆地である。この小盆地に集落と耕地が集中しており、地質は大阪府市町村統計台帳には「赤地多く、岩石少なし、肥沃」と記載されている。

吉川地区を含むこの周辺地域一帯は、川西市国崎、猪名川町銀山を中心とする東西20km、南北15kmにもわたる大鉱山地帯の真っ只中にあり、いわゆる「多田銀山」として、古代より豊富な産出量を誇っていた。この鉱脈が吉川地区の歴史に少なからざる影響を与えたことは想像に難くない。吉川地区と鉱山との関わりは次節にて記す。



第1図 豊能町位置図



第2図 豊能町地勢図

第2節 歴史的環境

豊能町では、吉川地区の隣接地域や木代地区で大規模な宅地造成が行われているが、それ以外の地域には大きな開発はなく、山々の合間に田園が広がる自然景観を残しつつある。近年、この田園風景も、圃場整備や宅地開発の余波で徐々に姿を変えつつあるが、それに伴いこれまで知られていなかった遺跡の発見や発掘調査により、おぼろげながらこの地域の実態が明らかになりつつある。歴史的環境や調査成果の詳細は、既刊の報告書¹⁾を参照されたいが、これまでの調査で判明した考古学的成果の概要を述べてみる。

豊能町における遺跡としては、1982年に調査が実施された川尻遺跡において、旧石器・縄紋時代の遺物が確認されたのを嚆矢とする。弥生・古墳時代の遺跡は未確認であったが、2001年の高山地区の分布調査で、弥生～古墳時代の遺物の散布が確認され、同時代の遺跡の存在はほぼ確実と見られている。1995年の九木田遺跡の試掘調査では、柱穴を初め須恵器・土師器等が出土し、奈良時代後半の遺跡の存在が明らかにされた。前述の川尻遺跡の調査では、平安時代のものと考えられる掘立柱建物跡や土坑、焼土面が検出され、焼土面の周辺から釘・ノミ状工具などの鉄製品やスラグが出土した。土坑からは須恵器・土師器・黒色土器椀等が出土しており、小規模な鍛冶場と推定される。

中世にはいると当町内の遺跡の質・量ともにわかに活気を呈してくる。川尻遺跡では、中世の瓦器・須恵器・土師器等を出土しており、未調査ではあるが、切畝中ノ垣遺跡、切畝室前遺跡、切畝下平尾遺跡では、いずれも瓦器・須恵器・土師器等が採取されており、中世の集落跡と考えられている。



第3図 周辺遺跡分布図 1.吉川井戸城跡 2.吉川城跡 3.高代寺伽房跡 4.ヤシキ谷遺跡 5.光ヶ谷遺跡

中世後半期以降には、山城が町内各所に存在するようになる。余野地区に存在する余野城跡遺跡では、1985年発掘調査が行われ、この城跡の南東に接して、深さ2m、幅30mにも及ぶ大溝が城の裾をめぐる形で検出された。この遺構の建造は、13世紀代まで遡ると考えられており、当地域の遺構としては規模が大きく極めて異例である。1992年の発掘調査では、余野城跡遺跡の



第4図 現況合成図

■ 今調査した施設

■ 通称「城山」のあったと伝えられる場所

北東端にあたる地点で、13世紀前半の瓦器・土師器が大量に出土している。遺物は近世の整地土層からまとまって出土しており、遺構は確認されなかったものの、貴重な一括遺物となった。

さて、今回の調査地の吉川地区の歴史には、歴史的に見て二つの大きな要素が関連していると思われる。そのひとつは「高代寺」であり、いまひとつは「鉱山」である。

高代寺は寺伝²⁾によれば、天惣年間（957～961）源満仲により草創され、最盛期の治暦年間（1065～1069）には、寺領は七郷・千石にも及び、僧房は十二を数えたといわれる。その後一時的に衰微したこともあるが、元禄年間（1688～1704）には再興され、摂津名所図絵にも高代寺の隆盛ぶりが所載されている。地域内に現存する寺院はいずれも高代寺の末寺として存在したと伝えられており、高代寺が当地域に重要な位置を占めていたことが窺われる。

高代寺が草創される以前から、この地は多田源氏の所領であったが、少なくとも文永年間（1264～1275）には、当地域の領主として多田源氏の一族である「吉川氏」が登場しており³⁾、同氏の支配は、天正年間（1573～1592）吉川氏が滅びるまで継続したと考えられる。吉川氏は、多田源氏一族内でも有力者であった⁴⁾。当地が狭小な耕地面積にもかかわらず有力者である吉川氏がこの地を領有し続けた故は、鉱山脈という大きな資源が存在した故であろう。

鉱山地帯は、「奇妙」「銀山」「七宝」「高山」の四つの親鉱から構成され、当吉川地区は七宝鉱山の中心であった。七宝鉱山の開鉱は明確ではないが、隣接する奇妙鉱山の歴史が平安時代まで遡ることから、同鉱山の歴史もほぼそれと同時期と考えられる。鉱山の探掘は吉川地区では、盛衰はあるが明治時代まで続いている。

埋蔵文化財に関しては、当地の包蔵状況はいまひとつ明確ではない。また、かって発掘調査が行われたことも皆無である。当地域の周知の埋蔵文化財包蔵地は第3図のとおりであるが、当地域では、中世にかかる遺跡が大半であり、高代寺及び鉱山に関わるものと中世城郭が周知の埋蔵文化財包蔵地のすべてである。今後の調査によって当地の歴史も次第に明らかになっていくものと考えられるが、特に当地に数多く存在する生産址遺跡としての鉱山関係の調査の充実が当地の今後の課題となってくると考えられる。今後の調査の進展が期待される。

註

- 1) 大阪府教育委員会 1982『川尻遺跡現地説明会資料』
大阪府教育委員会 1985『余野城跡現地説明会資料1』
豊能町史編纂委員会 1987『豊能町史』本文編
大阪府教育委員会 1992『余野城跡発掘調査概要』
大阪府教育委員会 1993『切畠中ノ垣内遺跡発掘調査概要』
豊能町教育委員会 1995『丸木田遺跡試掘調査概要報告書』
高山地区文化財調査団 2001『高山地区文化財調査報告書』
- 2) 吉川村誌（1990豊能町教育委員会）による。
- 3) 高代寺日記（内閣文庫所蔵）の記述による。
- 4) 3)と同じ。

第2章 調査にいたる経緯

今回行われた調査は、大阪府池田土木事務所による「急傾斜地崩壊防止工事」に起因するものである。経緯は後述するが、残念ながら調査時点では遺跡の中心部分は攪乱を受け、遺構や遺物の原位置を十分確認することができなかった。

「井戸城」については、昭和45年前後に行われた国道477号線吉川バイパス工事によって、遺構がほとんど消滅したものと認識されており、周知の埋蔵文化財包蔵地としていた範囲も、今回の調査地から50m以上隔たった南の山裾部分であった。平成13年2月、大阪府池田土木事務所による「急傾斜地崩壊防止工事」が当該部分におよび、機材搬入のため重機を今回の調査地に進入させたところ、おびただしい瓦片と礎石と考えられる礫群が検出され「井戸城」の範囲が当該部分にまで及んでいることが確認され、速やかに遺跡発見の手続きがとられたのである。

今回の調査は、大阪府池田土木事務所と協議の結果、さらに北方に延長施工される「急傾斜地崩壊防止工事」ため、当該部分の遺構の有無の確認調査と新たに発見された遺構の調査を目的とするところとなった。しかしながら、予想以上に重機の進入による遺構の損壊は大きく、わずかに残っていた削平部分の「礎石・包含層・遺構面」も大きく損壊しているため、やむなく発掘調査による「面的調査」は必要最小限にとどめ、「測量調査」に重きを置くことにした。遺構は前述のとおり損壊を受けているものの、現時点ではこれ以上の破壊が行われるおそれではなく「井戸城」の全体を把握するためにも、「測量調査」による基礎資料の充実が重要であると考えた故である。

第3章 調査の成果

井戸城は、吉川地区の中心部、妙見山からほぼ南東に派生する尾根上に存在する。当地は吉川地区を縦貫する旧街道を眼下に一望できるばかりか、井戸城に関連すると思われる西側山上の「高台寺」とその派生尾根上に存在する城郭遺構（通称「吉川城」）を見通すことができる好位置に立地している。

地元では、通称「城山」とは吉川バイパス工事で消滅した部分（第4図参照）を呼んでいる。当該尾根上には出や池もあったと伝えられており、相当の平地部分があったと考えられる。当該部分の一帯には瓦片も散布していたという証言もあり、当該地域には何らかの施設が存在した可能性は高いが、その内容については一切不明という他はない。

1. 測量調査（第5図）

井戸城は、妙見山脈の派生尾根の突端上に築かれた中世城郭である。現状からは、郭と認識される範囲は、南へ伸びる尾根の平坦部分（第5図・B区）のみであるが、吉川バイパス工事で消滅したA区域に隣接して細長い削平地C区が存在する。

B区は、尾根西側から河川への崩落により大きく崩壊しており、すでに郭中心部分の西側半分以上は失われていると考えられる。A区は、ほぼ全面にわたって消失しているようであるが、郭の外郭の切岸や土塁等の遺構が遺存している可能性もある。また、C区は大きな破壊を受けておらず、旧来からの状態を保っているため、遺構の遺存状態は良好と考えられる。

以下、区ごとに詳細を記す。

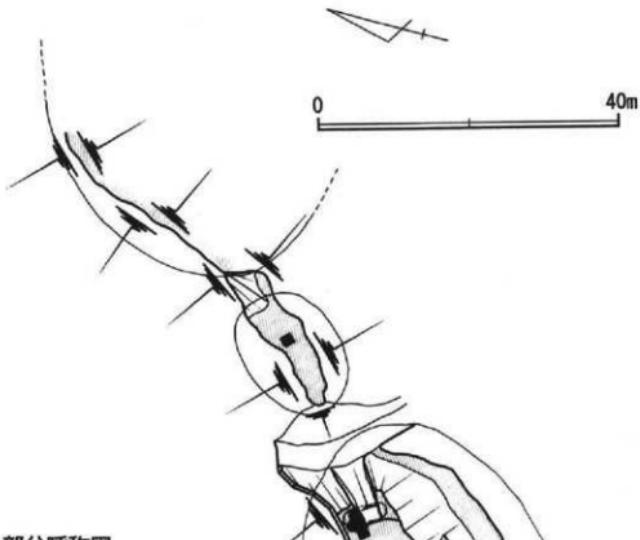
① A区

A区は、地元では「城山」と呼称されていた部分の西端部に存在する。現状は、吉川バイパス工事の際の影響が大きく、幅約0.5×長さ約20mにわたる細長いナイフリッジのような削平地らしきものの端部を残すのみである。遺構の状況は明確ではなく、現地形が自然地形であるのか城郭築城によるものかは明確ではない。地表面は、「にぶい黄橙色系のシルト」が露出しており、この土層が地山層に相当するものと考えられる。

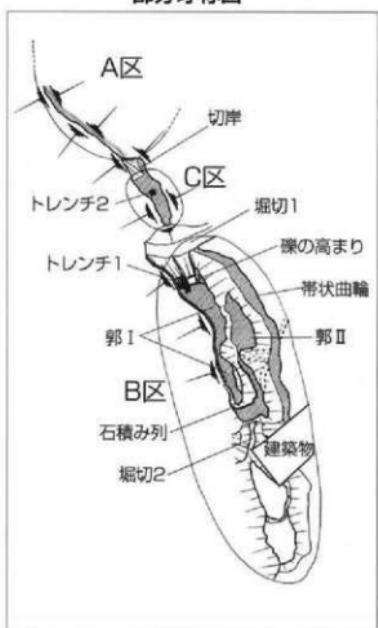
A区西側斜面は、バイパス工事の影響は免れているが、後述するようにB区で検出されたような石積み状の遺構は一切認められなかった。B区同様、西側斜面が崩落した可能性は考えられるが、斜面の極めて整然とした状況から、石積みが存在した可能性は極めて低いと判断される。A区とC区の境界部分は、郭の付属設備である「切岸」に相当するものと考えられ、高さ約2mを測る。かなり風雨の浸食を受け地山である「にぶい黄橙色系のシルト」が露出している。自然地形としては不自然な傾斜変化を示しており、城郭築城に伴う設備と考えたい。

② B区

B区は、「堀切1」をはさんでC区の南に位置する。当区では、妙見山脈の派生尾根を「堀切1」で分断するとともに南方尾根にもさらに「堀切2」を設けて独立した空間を創り出しており、典型的な中世山城の削平郭の要素を備えている（以下、当区の削平地部分を第5図のとおり「郭



部分呼称図



第5図 井戸城平面図

I」等と呼称する。)。「郭I」は、幅約5m×長さ約40mの細長い不定型の形状を呈する。「堀切2」は建設工事のため破壊されているが、かろうじてその概要は窺える。また「堀切2」以南にも階段状に削平地が認められ、この部分にも郭が配置されていた可能性が存在する。

「郭I」の東側には比高差2mをもって小空間「郭II」が配され、その下部にはさらに帯状の曲輪である削平地が配置されている。これらの設備配置より当区は独立した城郭としての機能を有していたと推定され、明確な虎口は検出できなかったが、南側より「郭II」を通過して登城するルートの存在が推定され、「郭II」の機能が「馬出し」的な役割を担っていた可能性も存在する。「郭I」北側には、深さ5m、幅10m以上にもおよぶ「堀切1」を配しており、自然地形を巧みに利用しつつ、手を加えて堀切として活用したものと考えられる。

特筆すべきは、郭南側斜面を中心として存在する「石積み」である。この「石積み」は、郭の削半部分の下端部分に存在しており、直徑10cm～拳大の礫が高さ40～80cm、奥行き約30～40cm程度に積み上げられている。崩れている部分では一見、石垣の裏込め石のようであるが、遺存状況の良い個所では明らかに表面を意識して積み上げられている。この石積は、南側では郭西側にも巡っていることから、崩壊した部分にも石積が存在したと考えられる。機能としては、郭の土留め的な役割を担っていたと推定され、石垣が普及するまでの過渡的な工法であった可能性も存在する。

「郭I」は、前述のとおり、重機の浸入のため搅乱を受けており、削平の状況は明らかではなく、また、その際には、残念ながら遺存していた礎石と考えられる石群が「郭I」東側斜面に移動を受けて原位置を失っており、原地形は大きく変化を遂げているものと推察される。郭北部端には、部分的には破壊を受けているものの、礫で構成された高さ約0.5m、平面形約5×8mの楕円形の「礫の高まり」が存在している。この「礫の高まり」は、前述した「石積み」を構成する礫と同種類の河原礫から構成されており、関連する遺構として注目されるが、実態は不明である。

③ C区

A区の南側に位置し、A区とは約2m下位、「堀切1」の堀底から約5m上位に位置し、「郭I」とほぼ同じ標高を測る。当区は、約4×15m程度の長楕円形の平面形状をもつ。遺構の遺存状態は良好であるが、区域の面積は狭小である。削平状況は良好とは言いがたいが、明らかに削平を行った痕跡は認められ、城郭設備である郭を構成するものと考えられる。当郭の東側には上塁状の遺構が存在するとともに、道が遺存しており、当道が登城道として使用された可能性がある。また、周囲には「郭I」で検出されたような「石積み」が存在した痕跡は認められなかった。

2. 発掘調査

発掘調査は、A区を除くB区とC区においてトレンチ調査を行った。

B区では、すでに重機が進入し整地が行われているため、礎石が移動され、遺構面自体も削平整地が及んでいる。そこで、比較的整地が及んでいない「郭I」北側端部の礫層部分に第1トレンチを設定した。C区においては、最も削平地幅の広い個所に第2トレンチを設定した。(第5回参照)

① 第1トレーニング (第6図)

面的には十分な調査面積とは言いがたいが、原状がかなり旧状を失っているため、一部を調査したにとどまっている。トレーニングは 4×2 mを設定し、上から礫と腐食土の混在層約30cm、礫とシルト土の混在層15cmを掘り下げたところ、郭建設当時と考えられる整地面に到達した。掘り下げはこの整地面の検出までにとどめ、地山面までの観察は重機の進入によって生じた壁面を利用することにした。

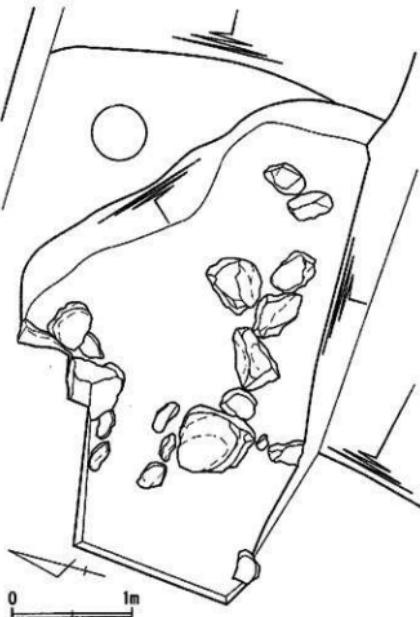
重機によって開削された壁面を観察すると、地山面を含めて整地面までの土層の構成は3層で構成されている。第1層は表土層で「暗褐色腐食土層」であり、2層は「にぶい黄橙色系のシルト」、地山層である3層も2層と同系の土質である。注目すべきは、2層と地山層である3層の間に厚さ2cm程度の炭化物が層状に存在することである。この炭層は重機の進入路部分にも水平にはほぼ同レベルで存在していることから、地山面にはほぼ全面にわたって炭層が存在していると考えられる。

これらのことから、3層上面は削平地であり、先行する遺構面であると推定される。また、2層は整地のために行われた盛土層であると判断される。3層上面から整地面までは約30cmの高差があり、整地に際しては大規模な盛り土が全面に行われたことを窺わせる。

遺構については、明確な城郭遺構は検出できなかったが、整地面上に40cm大の石材が列状に出土した。この石材は列状を呈してはいるが、その天端・側端ともに基準性はみられず、さらに、この石列の周辺および下に瓦片が大量に散布していることから、城郭として機能を失った後、この石列が形成されたものと考えられる。瓦片の出土は、整地面下には全く及んでいないことから、石列と瓦片の廃棄はほぼ同時期に行われたものと考えることができる。さらに、出土した瓦片は細片化しており、故意に破損された可能性が存在する。これらの人為的な破棄状況は、「城割り」や「廢城」の様相を考察する上で注目すべきことであろう。

② 第2トレーニング (第7図)

第2トレーニングは、通称「城山」の一段下がった細長い削平地であるC区の中央部に設定した。褐色腐食土層である表土下約10cmで地山面に到達した。層は表土のみの単層で遺物・遺構は確認できなかったが、地山層が水平に広がっている状況が確



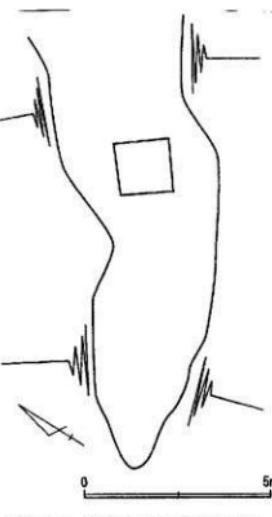
第6図 第1トレーニング平面図

認できたため、尾根が削平されたことは追認された。地山層は「にぶい黄橙色系シルト」である。第2トレンチの調査成果と当郭区域は極めて狭細であることから、土壘・削平地以外の城郭関係の構築物の存在の可能性は極めて低いと考えられよう。

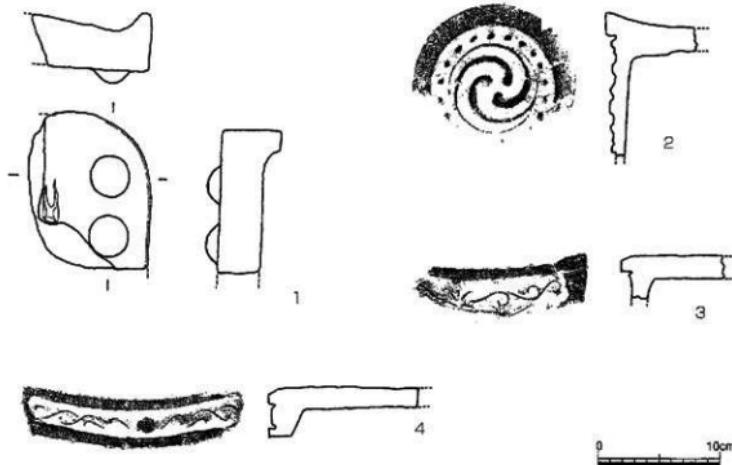
3. 出土遺物（第8図）

第1トレンチから大量の瓦片が出土し、郭Ⅰの周辺からも相当の瓦片が採取された。採取された瓦片は、土の付着状況から土中にあったものが重機の整地の際に地表面にでてきたものが大多数であると考えられる。遺物は十師質灯明皿の細片と備前焼の大甕細片を数点含む以外はすべてが瓦片であり、日常生活の痕跡をとどめる遺物の出土が僅少であることが特徴的である。出土した瓦片は、軒丸・軒平・丸・平瓦と飾瓦である。確認される限り、軒丸・丸瓦はほとんどが「コビキA」の手法を使用しているが、統一性はなくおおよそ3グループに分類できる。近隣地域の同時代と考えられる城郭から出土している瓦に比してかなり小振りであるのが特徴的である。

第8図-1は、鬼瓦とみられる飾瓦である。残存部は $13 \times 10\text{cm}$ 、厚さは外縁部で約5cmを測



第7図 第2トレンチ位置図

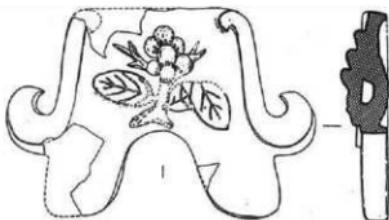


第8図 出土遺物

る。胎土は粗く、かなり砂を含む。他にも同瓦とみられる破片が8点程あるが、接合による復元にまでは至っていない。周縁部に直径3cm程度の珠文を配して、中央部下方に幹から葉が出る文様をレリーフ状に造り付けているようであるが、詳細は不明である。類似する飾瓦として福岡県「鷹取城址」(第9図)のものがあるが、幹の部分が本資料のほうがやや伸びていると思われる。中央部に配された文様は「柏」とも「橘」ともみえ確定はできないが、何らかの植物系の文様をもった飾瓦であると考えられる。(写真1参照)

第8図-2は軒丸瓦である。内区に左巻きの三つ巴文を置き、外区には連珠文を20個配している。三つ巴文の尾部は接続しており、丸瓦端部には、接合の際のクシ目が見られる。凸面には、縦方向に面取りが見られ、凹面には布目痕と瓦当接合部にヘラナデ調整を施し、瓦当面には離砂がつく。第8図-3は軒平瓦で、中心飾は五葉で中央の三葉は先端部がやや肥厚している。この飾りから派生するように脇飾の唐草文がつく。唐草文は尾部が連続した3反転文で、第2文は枝分かれしているように表現されている。

第8図-4は軒平瓦で、中心飾は宝珠であるが、かなり摩滅している。脇飾りは4反転する飛び唐草文であるが、反転方向は下・下・上・上というセットになっている。



第9図 福岡県鷹取城出土鬼瓦



鬼瓦破片



レリーフの拡大

写真1 出土鬼瓦破片

第4章 まとめと考察

吉川村誌によれば、当城郭は「藤原仲光の城跡……当寺（西方寺）の北方うしろ山なり、但満仲公家臣にて此所へ出張り、仲光へ養子に給はる源治丸は此所に住居したまひて只今西方寺の境内則是なり伝々」とある。また、寛政3年当時の西方寺住職による記録にも「……藤原仲光之城跡之下にも庵を結ぶ……」との記事がある。藤原仲光は、源満仲の家臣で長徳年間（995～999）の前後に吉川を統治したと伝えられている人物である（吉川村誌）。

このように、地元では少なくとも近世の段階では当城郭の地を、「藤原仲光の城跡」と認識していたようである。この「藤原仲光の城跡」が、現在の西方寺の北方に連なる妙見山派生尾根上のどの範囲を指すのかは全く不明である。また、地元では藤原仲光の城内には「龍徳寺」という名の寺院が存在していたとの伝承が伝わっているが詳細は不明である。しかしながら、当地の尾根上一帯は吉川地区内を一望できる極めて優秀な立地条件を備えており、また、尾根上の平坦地も相応の規模があったと考えられることから、当地域は古代から近世にかけて城郭・寺院としてまた出畠や池としてその姿を変貌させつつ利用されてきたと考えられる。

中世では、当吉川地区は多田源氏の一族によって代々統治されてきた。特に、戦国時代の明應年間（1492～1501）から天文年間（1532～1555）かけて、当地は多田源氏一族の吉川氏によって継続して統治されているようであるが、戦国の動乱の渦中、天正元年吉川氏は一時断絶するようである。吉川村誌の記事では、「吉川豊前守の城跡……何等形骸の残るものなく草茫々なり、天正年中吉川豊前守定満の據りし処なりと言ふ、然るに荒木景津守、又は塩川伯耆守の為に落城すると傳ふ、高代寺日記日付（原文）天正元年癸酉十月二十三日より塩河伯耆守長満以軍勢吉川城ヲ取り巻ク二十三日ヨリ十一月四日マテ十二日間合戦無止事則十一月四日ニ落城ス吉川豊前守定満同左京亮両人圍フ切り抜ケ退丹波其夜吉川ノ同名六人達姓ノ一族以上四十余人上下三百余人一時ニ亡ブ塩川伯耆守知行之落城ノ跡諸事支配スト云フ 伝々」との記載がある。当記事では落城した「吉川城」を高代寺山の派生尾根上に存在する城郭遺構と比定しているようであるが、比定の是非はさておき井戸城の命運にも関連する重要な記事として注目されよう。

吉川氏は清和源氏の一族で、平安時代末期から鎌倉時代の争乱で多出の本家が没落した後、塩川氏とともに源氏の嫡流として多田源氏の中核を担ってきた一族である。なお、吉川村誌で引用されている『高代寺日記』であるが、現存はしていない。内閣文庫の所蔵する『高代寺日記』（塩川家臣日記）には、同内容、同文脈の記事が記載されており、どちらが原本であるか判断はつきかねる。ただ、『高代寺日記』の方には吉川村誌で引用する『高代寺日記』より詳しい部分がわずかにある。この『高代寺日記』の史料としての評価は一定してはいないが、近年史料としての信憑性が再評価されつつある（藤原1982）ようである。

さて、今回の調査では、第3章で報告したように大きく分けてA区を中心としてC区を含む区城とB区を中心とする区城の二つの異なる性格の城郭城が認識できた。

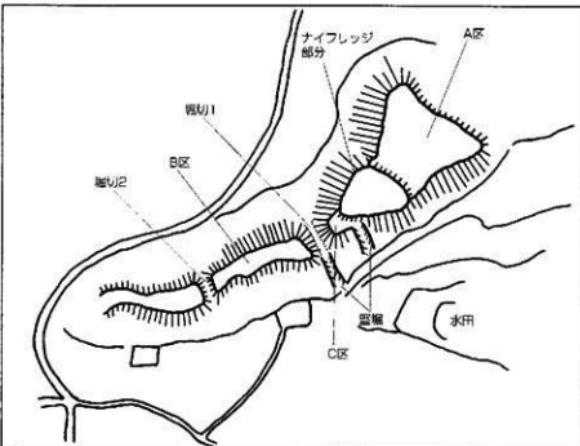
A区を中心とした区城では、付属施設と考えられるC区でわずかな削平地と土壘、切岸の存在が確認されたのみで、それ以外の遺物・遺構の検出はされていない。地元で「城山」と呼称される「主郭」と考えられるA区の中心部は残念ながら府道バイパス工事によって消失しており、これ以上の追求は困難である。前述したとおり、地元の聞き取り調査では、A区のバイパス工事に

よって消失した部分には相当の平坦地があり、池・田畠があり瓦片が散布していたということである。

昭和20年代の米軍による航空写真からの立体視（第10図参照）によれば、消失部分には、現存するA区のナイフリッジ部分を一辺とする辺長約40mの正三角形状の平坦部とその北方・片を上底とし高さ約50m、下底約50mの台形状の平坦部が看取される。視覚上では正三角形状部分が台形状部分より一段高いように見え、台形状部の下底部分には、尾根を分断する堀切ないしは段差が見てとれる。これらのことから、このA・C区が中世城郭として機能していた可能性は極めて高いと考えられる。

B区は、堀切、帯状曲輪、豎堀（第11図縄張り図参照）等をもって構成されており、基本的には中世城郭の構成をとっているが、出土遺物からは織豊系の城郭と呼びうるものであろう。出土した丸瓦は、ほとんどがコビキA法で製作されており、一片のみコビキB法の製作手法を確認した。大多数をコビキA法が占めそのうちに若干のコビキB法の瓦が存在するという瓦の製法構成から、この瓦群の時期を天正年間（1573～1592）後半期におくことが可能であろう。この区の郭Iの中心部には、礎石と考えられる巨石が配置されており、規模は不詳であるが、当郭に天正年間後半、瓦葺建物が存在したことはほぼ確実であると考えられる。また、この建物は、当区の下層に存在する炭層面から盛土によって嵩上げして整地し建設されたと考えられ、下層面にも炭層と化した遺構が存在したと推定される。郭を囲繞する石積み列はこの盛土部分に設置されており、盛土と同時期に構築されたと考えられることから、瓦葺建物に伴う施設と考えられる。以上の検討から、天正年間後半、当区には石積みで構築された基礎をもち瓦葺建物からなる織豊系城郭が存在していたと考えられる。

それでは、この瓦葺建物の終焉はどうであったであろうか。現地形状や瓦の出土状況からある程度の推察を行うことができる。まず、重機が進入する以前の当区郭Iの中心部の地表面の状況は、礎石群と礎で構成されたマウンドともいべき高まりが存在していた（第11図参照）。瓦は主にこの礎層の下部より出土している。その状況は、瓦葺建物建設の整地面に人頭大の石群とともに破碎された大量の瓦を一か所にまとめて投棄し、さらにその上に大量の礎を覆い被さるように積んでいるものであった。この状態は、瓦葺建物が自然に崩落したもので第10図 米軍航空写真からの立体視による縄張り推定図



中島康隆作成現図に加筆

はなく、人為的に破壊され遺棄された状況を現わしているものではないであろうか。島原の乱で著名な長崎県原城の発掘調査では、原城の本丸虎口に石垣の石材などを埋め込み破却し、さらに地山の粘土質の土で覆うという状況が検出されている。当B区郭では、明確な虎口の破壊は確認されていないが、破却ともいるべき徹底的な破壊の痕跡を示しているものと考えたい。

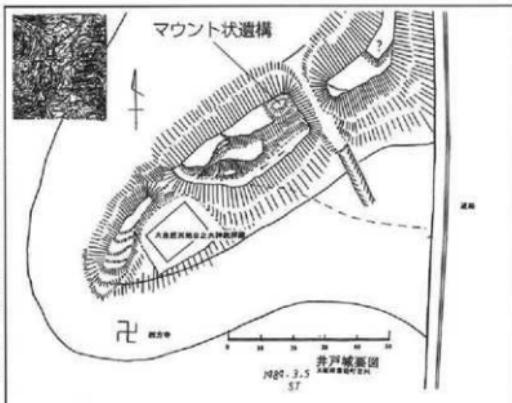
最後に今回の調査の成果をもとに、古記録を使って当城域の歴史を推定を試みる。

まず、平安時代、この地に藤原仲光の城と伝えられる城館が建設された伝承が存在している。今回の調査では、古代に遡る遺構・遺物の検出は皆無であり、伝承の裏付けはできなかったが、妙見山の尾根根の現在の西方寺区域からバイパス工事で消失したA区までの尾根の広い範囲のいずれかの位置に当城館が築かれていた可能性がある。

次に『高代寺旧記』や『高代寺日記』に登場する吉川氏滅亡の城となる「吉川城」とはどの城を指すものであろうか。吉川村誌の作者は、「吉川城」を高代寺山尾根上の城郭遺構と比定しているようである。当吉川地区の地形は山が多く平地は僅少であるが、今回調査した井戸城（今回のA～C区）の地は、藤原仲光が統治の根拠地としたと伝えられるように、地区内唯一の政治上・戦略上極めて有利な地である。中世においても、吉川氏が本拠とした城は当井戸城であったと考えられる。また、高代寺山尾根上の「吉川城」の遺構は削平地こそ相当の面積はあるが、主郭の部分的な調査では焼土面等の戦闘の痕跡を示すものは全く出土しなかったということである¹⁰。これらのことから、天正元年、塙川軍に取り囲まれて落城した「吉川の城」とは、当井戸城を指す可能性が高いと考えられる。

吉川氏が天正元年まで拠った井戸城は、今回調査地のA・C区とB区炭層面を範囲とする中世城郭である可能性がある。A・C区とB区炭層面が同時代の遺構とする確証はないが、B区炭層面の上層に存在したと考えられる瓦葺建物に関連する石積み列や礎石がA・C区には存在しなかったことからの推論である。また、B区炭層面は天正元年時の落城の際のものであると考えたい。この炭層面はC区が狭小で建物が存在しなかつたため検出されなかつたが、A区においてはバイパス工事による消失以前は同様に炭層面が存在した可能性が考えられる。

天正元年時の落城後は、A・C区は遺棄されたと考えられるが、C区の地は織豊系城郭として再利用される。石積みで土留めを行い盛土で嵩上げされた整地面に瓦葺建物が建設されたことはすでに述べたが、当建物は立地位置から戦略上の拠点というより、威信的なシンボルとして政治色の強いものであったと考えられる。この建設を行った者は、文献記録どおり塙川氏であったことはほぼ間違いないことであろう。出土した鬼瓦も、建物規模に比して不相応に巨大であり、建物のシンボリック



第11図 井戸城縛張り図（バイパス工事後）高橋（1989より）

性を首肯できよう。

さらに、この鬼瓦の紋様から興味深い事が浮かび上がってくる。この鬼瓦の紋様は、「橋」紋であり家紋のモチーフと推察される。家紋が鬼瓦の紋様のモチーフとして使用されるのは、天正4年築城の安上城以降のことであり、天正年間後半期と推定した瓦の年代とも矛盾しない。さらに『高代寺日記』には、「末々吉河家ノ破風ノ紋ハ立華（橋）ヲ三ツ付ルト云傳」とあり、この一致は偶然ではないであろう。ただ、この鬼瓦は、吉川氏滅亡後の塙川氏の統治時代に製作されたと推定される。『高代寺日記』によれば天正4年、塙川一族の運想軒は当主塙川国満より吉川の地を譲られている。この運想軒は、もとは吉川国満の実子であったが、国満の弟吉川姓を継いだ吉川頼長の養子となり、吉川右京進頼國とも名乗っていた。したがって『吉川村誌』に天正4年頃の統治者として登場する右京進頼國とは、吉川運想軒に他ならない。天正元年の吉川氏滅亡以後の天正年間後半段階における吉川氏の家紋の使用は、天正4年より吉川の地を領有した吉川氏の家名を継ぐ吉川運想軒の行為として理解されるのではないであろうか。

多大な労力を傾注して建築された瓦葺建物も、その存続は長くはなかった。おそらく、塙川氏の没落とともに、当城は破却されたと考えられる。吉川村史によれば吉川地区は、文禄3年頃には豊臣秀吉の家臣の木下與三左衛門（與右衛門）の知行地となっており、この前後に城の破却が行われたのではないであろうか。城築城後わずか10~20年のことであり、それ故、地元民の記憶にも伝承として長く残らなかったものであると理解したい。

今回の調査では、A区に散布していたと伝えられる瓦や尾根最南端の削平地、礫層の性格等解明できなかった点は数多く残った。今回の調査地のB・C区については破壊の及んでいない部分も多く、今後も探究の芽が十分に残されているものと考えられる。今後の調査の進展と中世城郭の保護意識の向上を希うものである。

謝辞 本章の記述は、中世城郭研究家の高橋成計氏、中島康隆氏両名のご指導・ご助言によるところが大きいものである。記して感謝するものである。

註

- 1) 出好好氏よりご教示いただいた。

引用参考文献

- 『高代寺日記』(上)(下) 内閣文庫所蔵
山田文造 1990 「吉川村誌」(復刻版) 豊能町教育委員会
藤原正義 1982 「[高代寺日記]・考」(下)
—宗祇論のための覚え書き—『北九州大学文学部紀要』第29号
高橋成計 1989 「豊能町の中世城郭」

写真図版
1

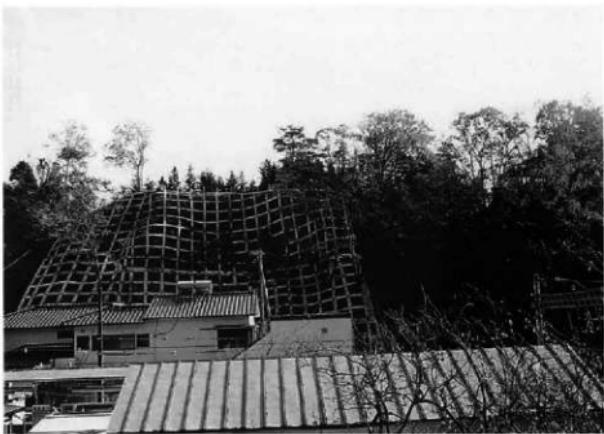


調査地遠景（南より）



調査地遠景（西より）左よりA区、C区、堀切1、B区

写真図版2



調査地遠景（西より）左より堀切1、B区、堀切2



堀切1（西より）

写真図版3



A区調査前状況（ナイフリッジ部分）



A区 西側法面

写真図版4

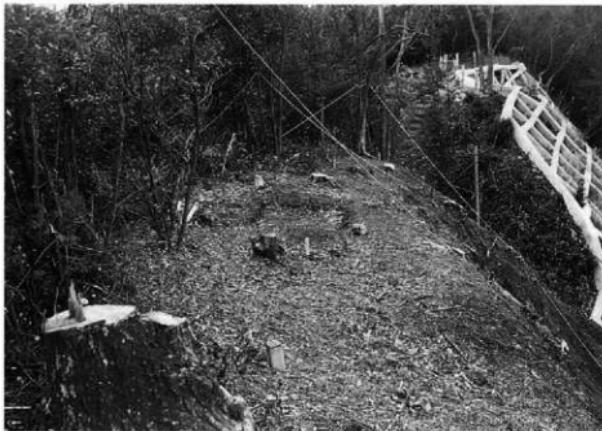


A区切岸とC区



B区調査前の状況

写真図版5



A区よりC区・B区を望む



B区・礎の高まり

写真図版 6



B区遺構（南より）



B区遺構（東南より）

写真図版7



B区炭層



C区第2トレンチ

出土遺物



軒丸瓦（コビキA）



軒丸瓦（コビキB）



鬼瓦破片



鬼瓦破片（葉文）



軒丸瓦当



鳥表破片



土師皿破片



器鉢・甕破片

報告書抄録

ふりがな 書名	よしかわいどじょうはっくつちょうさがいようほうこくしょ 吉川井戸城発掘調査概要報告書						
卷次	1						
シリーズ番号	豊能町埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	2						
編著者名	小嶋 均						
編集機関	豊能町教育委員会						
所在地	〒563-0219 大阪府豊能郡豊能町余野414番地の1						
発行年月日	西暦 2003年3月						
ふりがな 所取遺跡	所在地	コード 市町村・遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積m ²	調査期間
吉川 井戸城跡	大阪府豊能郡 豊能町吉川	27321 70	34° 54' 36"	135° 26' 54"	20011112 20011130	16	急傾斜 地崩壊 防止工 事
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
吉川 井戸城跡	城郭	室町～織豊時代	石列、堀切、切岸他	鬼瓦、軒丸瓦、軒平 瓦、平瓦、光明皿、 備前焼甕			

〈MEMO〉

⟨MEMO⟩

豊能町埋蔵文化財調査報告書第2集

吉川井戸城発掘調査概要報告書

発行日 平成15年3月31日
発 行 豊能町教育委員会
編 集 豊能町教育委員会
住 所 〒563-0219 豊能町余野414番地の1
印 刷 株式会社 廣済堂

TEL 072-739-0001